

西光寺だより

第二五二号 令和五年 四月一日発行

■今月のカレンダー■

仏法の鏡の前に 立たないと 自分が自分になれない

正信偈の中にも出てこられる七高僧の一人、善導大師は『仏説観無量寿経』を解釈された『観経疏』（かんぎょうしよ）の中で、

「お経は、お釈迦さまの教えであり、私を映し出す鏡のようなものである。幾度も読み、その心を尋ねるならば、智慧をいただくことが出来る。」

とお示し下さっています。

町で出会った知人から、「今日、鏡見て来た？」と聞かれびっくりして、鏡を探して顔を映すとさらにびっくり、額のあたりに、ものすごい汚れがついてありました。このような姿で人前にいたのかと恥ずかしくなる、そう思ったら、すぐに汚れを落とし恥ずかしくない姿に戻ろうとします。私たちが鏡を見ることは人さまの前に出たときに、この姿で恥ずかしくないかという気持ちからでしょう。

「お経は鏡」と喩えられたその鏡には、どのような私の姿（相）が映るのでしょうか。

一つは、「生老病死」という我が身の真実。また、多くの人々に支えられ、多くのいのちを犠牲にしてしか、生きることができない私が映ります。

もう一つは、凡夫である私の姿です。凡夫は常に自己中心。私たちは、社会の中でさまざまな立場の人たちと暮らしており、ときとして考え方の違う人と出会い、対立することも少なくありません。そのとき自己中心の私は「正しいのは私」と自分の正義を主張し、相手を責

めます。相手もそうですから、対立がますます激しくなり、争いになってしまいます。時には、暴力に訴えてしまうという事もあります。同じように、国と国がお互いの正義を振りかざし、相手国を非難し対立する。ついには武器をもって攻撃し合うと、戦争ということになります。それは、自国の正義のために人を殺すということに繋がります。

仏さまの智慧をいただくとは、「自分は自己中心の凡夫である」ということを聞くことです。でも親鸞聖人は、どれだけ聞いても、凡夫は死ぬまで凡夫だとおっしゃいます。しかし、自己中心ではあるけれども、そういう生き方しかできていなかった自分に気が付くことができる。それが、お聴聞、すなわち、お経の心を尋ねた成果です。

凡夫であることを自覚したら、今までの生き方が自己中心で、恥ずかしいものだと気付きます。そうすると、「今まで、この道でよしと真つすぐ進んでいたけれど、ちよつと方向を変えて、恥ずかしくない生き方をしてみよう」と変わっていく。

仏法の鏡は、私自身を映し出し、私が私として生きる方向性を指し示してくださっているのです。

（法語カレンダー 解説書より）

◆先月の報告◆

①三月二〇日（月）西光寺本堂にて仏教婦人会追弔会・総会を厳修致しました。行事も思うようにできず、そんな中18人の方々ようこそのお参りでありました。特に今年には5人の会員との別れがあり、老坊守よりいただいた懐かしい話に思いを寄せることでありました。

尼講の時代から昭和53年仏教婦人会となり、累々と続いてまいりました。会員の方々の努力があつての今、先立たれたお一人お一人を思いますと、深く敬意を表します。ありがとうございました。

②三月二六日(日)総代会を行いました。例年通り、役員編成や会計報告・行事報告を行いました。役員の方にはお速夜の際に文書を配布いたしますのでよろしくお願い致します。また会計に関して、報告書が必要な方は西光寺までご連絡下さい。

旧役員の方々一年間ありがとうございました、そして新役員の方々どうぞよろしくお願い致します。

③四月二日(日)京都西本願寺にて、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要に西光寺から7人のご門徒の方々に参加して参りました。茨木東組からは119人の参加でありました。

全国から参拝に來られ、この法要のためだけの御影堂のお荘厳、そして新しく定められたお勤め、初めてのことで心配でしたが、大きなトラブルもなく無事に法要を終えることができました。

この一生に一度のご法要にこうして皆様と参加できたこと大変感慨深く感謝の思いであります。皆様本当にありがとうございました、そしてお疲れ様でありました。



◆四・五月月の行事◆

・四月 十四日(金)

追弔会・春季永代経法要

午後二時～

西光寺本堂

◎御講師 岡 玲 師 (善照寺住職)

※昼のみ、お勤めとご法話があります。